人類の贖いを
成し遂げられた神の御子

マタイ27章45～56節
2022年4月10日
松田 基子 師

受難週を迎えました。イエス様の十字架の意味を深く知るべき時です。 そして、何よりもイエス様の十字架が、**自分の罪の為であった**事を、**真底自覚**しなければならない時です。
ローマ書の4章25節には、

「**イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです**」

とあります。 聖書は、

『イエス様の十字架の死は私達の罪のためであった』

と宣言しています。

では、罪とは何でしょうか。 **罪とは**、根本的には、**神様に叛くこと**です。 神様はこの世界を麗しく保ち、成長させて行くために、そこに、**愛を築いて行こう**と、人間を創造し、命の息を吹き込んで、神様との交わりが持てる存在として、世に送り出されました。 人間が神様の愛に信頼し、神様に全身全霊を以て、聞き従っていたなら、世界はどんなに素晴らしく、愛に満ちた所となっていたことでしょう。 しかし、人間は、神様に心から信頼しませんでした。誘惑者の言葉に魅力を感じたのです。人間の代表は、誘惑者サタンに同意して、神様との関係を切って、誘惑に乗りました。

誘惑は何だったでしょうか。創世記3章4節で、擬人化された誘惑者、

「**蛇は女に言った。**
『決して死ぬ事はない。 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる事を神はご存知なのだ』」

と、人間に神様に対する、疑いを起こさせると共に、人間の、

『**神の様になりたい**』

つまり、

『神様に従うのではなくて、**自分の思い通りに生きて行きたい**』

と言う心を掻き立てました。 その結果人間は、神様が人間を信頼してお与えくださった、自由意志をもって、神様に叛き、**自己中心の生き方**を選び取ったのでした。 この、神様に聞き従うことを拒み、**自己中心に生きることが罪**です。

すると、神様を知らない人は言います。

「人間が自分の意思で、自分で考えた通りに生きるのがなぜ、悪いのでしょう。 何故罪なのでしょうか」

と問うてきます。 では、知って欲しいのです。

『神様だけが絶対者です。 **人間**は神様に**造られた被造物**です。 神様は限りなく聖く、限りなく正しいお方です。人間はその神様に聞き従って初めて、何が善であり、何が悪であるかを知るのです。人間は神様から離れたならば、真の**聖さ**も、真の**正しさ**も、真の**愛**も**分からない**のです』

神様から離れ、自己中心に生きた人類は、愛し合って生きるどころか、他者を、弱い者を踏み台にして生きる社会を造ってしまいました。 罪の世界以外の何ものでもありません。

人類の**罪の根本**は、人間が神様に聞き従わないで、**自己中心に生きる**ところに在ります。

ところで、私達人間の命や人生は自分自身のものでしょうか。 いいえ、造り主である**神様のもの**です。 人間は皆、神様から**あずかった**、命と人生を、自己中心に生きて、神様からのあずかりものを、汚してしまっているのです。 それは**償われなければ**なりません。 しかし、罪に汚れた人間が、どんなに命を差し出しても、償えるものではありません。 命そのものが神様のものだからです。

何故罪がそれ程、重大なのかと言いますと、罪は人間の存在を、**永遠の滅びに引きずり込んで行く**からです。 人間は、人間自身だけでは生きていけません。 神様に結ばれるか、サタンに結ばれるか、常にどちらかに結ばれています。 自己中心に生きている時は、サタンに結ばれ、サタンの奴隷と成っています。 サタンに結ばれている限り、その存在は**永遠の滅びに向かって**います。 悲しい事に、人間自身はその事が分からないのです。

そのような人類に対して、神様は人間の命の与え主として、人類を滅びに向かわせることは、お出来になりませんでした。

『神様はその独り子をお与えになった程に、
世、つまり、罪に汚れた人類を愛されました。』

その人類が永遠の滅びから救われるためには、全人類の価値に勝る、神の**御子による罪の贖い**が**必要**だったのです。そのために、この世界に人となって生まれて来て下さったのが、 イエス様です。その贖いは、力によるものではありませんでした。 それは神の御子の体に、全人類の罪を負い、**身代わり**となって、**神様から罰せられ、罪を償う**事でした。

イエス様は、何と、罪ある人間の、罪の裁きによって、十字架刑を負わされました。

『金曜日の夜明け（午前6時）、指導者達は、最高法院全体で相談した後、イエス様を縛って、ローマ総督ピラトに引き渡ました。彼らは民衆を扇動して、ピラトがイエス様に十字架刑を科するよう強要しました。 結果ピラトは、群衆の声に負けて、イエス様に十字架刑を下しました』

『イエス様はローマ兵から鞭打たれ、茨の冠を被せられ、嘲られ、唾せられて、ご自分が架けられる十字架の横木を担がされて、ピラトの官邸から城外の、ゴルゴタの刑場まで、歩いて行かれなければなりませんでした。 途中でイエス様は道に倒れられ、キレネ人シモンに、十字架を担いで貰い、ゴルゴタの丘に辿り着かれました。』

『十字架の横木に、両手を釘で打ち付けられ、十字架が立てられました』

マルコ福音書によると、

『十字架に架けられたのは午前9時であった』と記されています。

イエス様の左右には、強盗が架けられました。彼らは、国粋主義的な運動家たちで、暴力的だったのだろうと推測されています。 ところで、人間は他人の痛みを平気で見ていられる、冷たい心を持っています。 十字架刑と言う、凄惨な苦しみを負う姿を見るために、嘲るために、集まって来た人々がいました。 民衆の自己中心の心は、イエス様が、神様の教えを説き、病人を癒し、パンの奇跡などをなさった事を通して、イエス様に、自分たちをローマの圧制から解放して、 自分たちの生活を楽にしてくれる、自分たちの願うメシアを期待してきました。

それなのに、ローマを倒すどころか、ローマの

力で、十字架に架けられてしまったのです。 自分たちの思い通りにならない、自己中心から出て来た怒りと失望で、民衆はイエス様に対して、

「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、
神の子なら、自分を救ってみろ。
そして、十字架から下りて来い」

と、罵倒しました。 民の指導者である祭司長達、律法学者達、長老達も、一緒になってイエス様を侮辱して言いました。

「他人を救ったのに、自分は救えない、
イスラエルの王だ。 今すぐ十字架から
降りるが良い、そうすれば信じてやろう」

イエス様は多くの苦しむ病人を癒されました。
しかし、その事は、彼らにとって、どんなに病人を癒したとしても、

『自分自身に奇跡を起こせないのであれば、メシアではなくて、唯の人間であることの証拠ではないか』、
『十字架から降りるという、人間以上のことが出来たら、メシアと認めてやろう』

と指導者達は、

『自分たちが一番偉いのだ』
『自分たちの判断が絶対なのだ』

と、傲慢に陥っていました。

罪ある人間には、

『愛は、犠牲を負う』

と言うことが分かりませんでした。 相手を生かす為には、自分の命を与えなければ、相手を生かすことは出来ないのです。 自己中心は、

『自分。自分、自分』

です。 相手を踏み台にして、自分に得ることです。 それがどれ程、相手を傷付ける事であるかが分からない。 それが罪です。
イエス様が十字架から降りられたなら、人間に救いの道はありませんでした。 宗教指導者達は、自分たちの考えが、神様の前に如何に間違っているか、と言うことが分かりませんでした。

「神に頼っているが、神の御心
ならば今すぐ救って貰え。
『わたしは神の子だ。』
と言っていたのだから」

と、神様の御心まで、遜って聞こうとはしないで、自分の考えを絶対化していた指導者達でした。

イエス様と一緒に十字架に架けられた左右の強盗達まで、人生の最後に及んで一緒になってイエス様に向かって怨念をぶっつけました。
イエス様の十字架の周りは、人間の罪が吹き出てきて、皆、神の御子のイエス様に、罪を投げつけた、人間の罪が顕わにされ、罪が集まった吹き溜まりでした。イエス様は神の御子の心と体に、その全ての罪を引き受けて下さいました。 マタイ27章45節に、

「さて、昼の12時に、全地は暗くなり、
それが3時まで続いた」

とあります。 真昼の暗黒、それは天地万物の創造主であられる神様の裁きと苦悩の現れでした。

旧約聖書のアモス書8章9、10節には、

「その日がくると、と主なる神は言われる。
わたしは真昼に太陽を沈ませ、
白昼に大地を闇とする」
「わたしはお前たちの祭りを悲しみに、
喜びの歌をことごとく嘆きの歌に変え、
どの腰にも粗布をまとわせ、どの頭の髪の
毛もそり落とさせ、独り子を亡くしたような
悲しみを与え、その最後を苦悩に満ちた
日とする」

と、罪に対する裁きが預言されていました。

創造主の愛と言うのは、独り子をも滅び行く人類の為に、十字架に架けられたのです。その愛は独り子に対しても、どれ程深い愛を注いでおられた事でしょうか。 その愛する独り子に、いま、全人類の罪を償うだけの罰を与えなければならないことは、とても耐えられない事でした。

暗黒は神様の裁きの現れであり、また、父なる神様の苦悩の現れでした。 暗黒が続く中、マタイ27章46節に、

「3時頃、イエス様は大声で叫ばれた。
『エリ、エリ、レマ、サバクタニ」
これは、
『わが神、わが神、なぜわたしを
お見捨てになったのですか』
という意味である」

とあります。 イエス様にとって、一番の耐え難い苦しみは、父なる神様に捨てられることでした。全き聖であられ、全き義、正しさに生きられる神様にとって、罪は呪い、滅ぼさなければならないものです。 神の御子のイエス様だからこそ、その重大さ、絶望をご存知でした。 しかし、イエス様の、

「わが神、わが神、なぜわたしを
お見捨てになったのですか」

と言う叫びは、決して神様への恨み、失望というものではありませんでした。 父なる神様に信頼する故に、心からの叫び

『父なる神様。 助けて下さい』

との思いから出された言葉でした。
神様とイエス様は、罪との戦いで、極限状況にあられるというのに、そこに居合わせた人々の内には、これを聞いて、

「この人はエリヤを呼んでいる」

と言う者がいました。 民衆の間では、義人が苦しめられる時には、エリヤが天から助けに来ると言う、民間信仰があったとされます。

イエス様の、

「エリ、エリ、」

と言う叫びを聞いた

「1人が、すぐに走り寄り、海面を取って
酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとしました」

酸いぶどう酒には、鎮痛の効果があったとされています。 ところが、49節を見ますと、

「ほかの人々は、
『待て、エリヤが彼を救いに
くるかどうか、見ていよう』」

と言ったのです。 彼らの、そして、人類の罪を引き受けて、神の御子は、苦しみの極みに在られるのに、当の人間は、それを見物する者となっているのです。 神様の嘆きはいかばかりだったでしょう。 人間であれば、徹底的に叩きのめしたことでしょう。 しかし、父なる神様と独り子イエス様は、ただ、**人類に救いの道を開くことだけ**に心を注いで、**忍耐の限りを尽くされ**ました。

50節に、

「イエスは再び大声で叫び、
息を引き取られた」

とあります。 ここに人類の**罪の贖**いが**成し遂げられ**ました。 51節に、

「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った」

とあります。

神様はイスラエルの永い歴史の中に、罪は罰せられ、贖われなければならないと言うことを、神殿の儀式を通して、教えてこられました。
ヘブライ9章22節に、

「血を流すことなしには
罪の赦しはありえない」

とある通り、神殿では、年に一度大祭司が、聖所と至聖所が区切られている幕を通って、至聖所に入り、動物犠牲の血を神様に献げて、罪の赦しを求めました。 動物犠牲の血で、人間の罪が赦される筈もなく、それは、毎年続けられて来ました。その様な不完全なものではなく、神の御子のイエス様が、罪なき体を献げられた事によって、完全な贖いが成され、不完全な動物犠牲を献げる必要はなくなりました。至聖所の幕が裂けた事こそ、イエス様の十字架の贖いが、完全である事の証明でした。

ヘブライの10章19節に、

「わたしたちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。 イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通って、新しい生きた道をわたしたちのために開いて下さったのです」

とあります。 イエス様による、新しい救いが約束されました。 自然界にも、地震が起こり、岩が裂けたことによって、大きな石で塞がれている、墓の蓋が開いて、聖なる者たち、つまり、イエス様を信じて、召された人達が、生き返るという奇跡が起こりました。

それは終末の復活の前触れでした。 イエス様が復活されてからは、その人達がエルサレム城内に入り、多くの人々に現れると言う奇跡も起こったと記されています。 一方ゴルゴタの丘の上には、十字架刑の執行を指揮してきた、ローマの百人隊長がいました。 彼は、イエス様が総督ピラトの手に渡されてからの一部始終を見て来ました。 その一部始終を見、自然界の奇跡を体験して、

「本当に、この人は神の子だった」

と証言したのでした。 ガリラヤから、従って来た女性達も、イエス様の十字架の死の証言者となるべく、その一部始終を見守っていました。
私達は、**自分も**また、**イエス様の十字架の周りにいる罪人である**事を、認めなければなりません。

『イエス様は、私の罪を負って、**私のため**に
贖いの**十字架に**架かって**下さった**のです。』

心から悔い改め、イエス様の十字架に縋って、罪を赦して戴こうではありませんか。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

自分の罪深さを分かろうともせず、
イエス様だけに十字架を負わせる、この深い
罪をお赦し下さい。このような者を尚も愛してくださるイエス様の御愛に応えて
生きる事が出来ますように、
常にイエス様の十字架を仰ぎ見る者と
ならせてください。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。